



京都のとある古民家

ダリアとカンナ

●1988

……夏の庭先から

ぼくの中で庭がひとときわかるく輝き始めると、それは決まって夏の風景である。

まだ小さかった頃のことだ。畳の上でゴロゴロしていると、縁側の向こうの明るい庭先に自然と目が吸い寄せられたものである。そんなときまっ先に目に飛びこんでくるのは赤、白、黄色、ピンクやオレンジの強烈な色彩のかたまりだった。

強い夏の日ざしの中で、今にもそこから色が溶けて流れ出てきそうだった。黒や黄色の大きな蝶がひっきりなしに飛来してはそこから離れ、小さな池の上をかすめるように飛び去ると、水面にはいつもぼっくり裂けた赤いザクロの実と、その向こうのどこまでも青い空が映っていた。

今はもうなくなったが、ぼくの育った家の、開放された八畳間からの眺めである。そしてぼくの間を常に刺激してやまなかつたあの鮮やかな色彩のかたまりは、右手の背の低い生垣と、そこに接した小さな花壇とからやってくるのだった。

それにしても、当時ぼくは草花にはほとんど興味がなかったはずなのだが、そこに植えられていた花の